

全国で年70億個が製造される豆腐容器。プラスチックの一種「ポリプロピレン（PP）」が原料だが、使用済みは埋め立てや焼却などに回され、リサイクルされていない。

「製造者として、じくじたる思いがあった」と話すのは豆腐製造販売「おとうふ工房いしかわ」（高浜市豊田町）の社長、石川伸さん（62）だ。2021年に目を付けたのは、東京の企業が開発した新素材。PPが49%、石灰石の炭酸カルシウムが51%でPP減量化につながる。シート状で、主に食品販売用の浅いトレイ、ボードなどに使われていた。

PPに比べて強度に劣り、高さ5センチ程度の豆腐容器に加工するのは難しかった。殺菌処理で加熱する際には小さな穴ができた。上部のビニールとの接着に隙間が生じたりと課題克服を重ねた。その結

12 つくる責任
つかう責任



つくる責任つかう責任

おとうふ工房いしかわ 高浜

新素材の豆腐容器を開発

果、厚さはPP単体の1・5倍、重さは1・8倍となり、コストは2倍に跳ね上がったが、値段への転嫁は避けた。

同社販売分に23年1月から活用し、表面に「プラスチック削減容器です」と大きく記載。スーパーや生協向けのプ



①減プラの豆腐容器をアピールする石川さん
②新素材容器の商品には「プラスチック削減容器」と記載
＝いずれも高浜市豊田町で

新素材パック、24年度にPPパックをそれぞれ1カ月程度、回収する実証実験も行った。

回収分は定規にリサイクルし、市内の児童に配布しているが、「ペットボトルは回収してペットボトルに生まれ変わる。豆腐容器も豆腐容器に再生すべきでは」と石川さん。現在はコスト面など課題

が山積みだが、その構想が形となる場合、強度の弱い新素材容器が混じると、リサイクル容器に支障が出る恐れがある。「一方通行の販売には新素材、リサイクルで回収する販売用はPP、とすみ分ける可能性もある。実現へのハードルは高いが、諦めずに取り組む」



同社は、豆腐を作る際に生じるおからのリサイクルを進め、15年に一般社団法人「日本乾燥おから協会」が発足した際には石川さんが初代会長に。今年2月には減プラ容器の開発、おからの再利用などが評価され、県の「愛知環境賞」優秀賞として同社が表彰された。（西山和宏）